

こもれび



文京区立目白台図書館館報

62年初夏号
(通巻第11号)
復刻版

も く じ

相馬御風と目白台（１）…………… 2

マイ・ブック マイ・ストーリー

日本酒で乾杯！…………… 6

“子ども絵本展に思う”…………… 8

“地域探訪”シリーズ

「神田川」の巻…………… 12

相馬御風と目白台

— 連載 1 —

相馬 文子

昭和25年(1950)5月、67才で没した相馬御風の東京での文壇生活は、明治36年(1902)から大正5年までの14年間で、同年3月に突然、郷里越後糸魚川に退住した後の文筆生活は、ひたすら良寛研究と主に越後を舞台にした独自のエッセイに向けられていった。

明治35年上京、早稲田大学予科(当時の東京専門学校)に入学し、大正5年に東京を去るまで、偶然と言おうか不思議にもその間の住居は、すべて目白台の範囲に限られている。今は亡き私の三人の兄たちも皆、目白台のいずこかで誕生している。

従って父御風は、郷里北国で暮していても、当時の目白台の一木一草までがなつかしく思い出されると繰り返し話していた。

御風が明治35年早稲田に入学当初は、牛込区横寺町に下宿、尾崎紅葉宅の近くで、時折路上などで紅葉を見

かけたという。

この学生時代には何回か下宿を変えていて、明治36年10月には、小石川区武島町13番地滝沢方となっており、翌年5月には、小石川区音羽8丁目24番地池田方、更に翌38年10月には小石川区関口駒井町1番地三上方と轉じている。早稲田大学三年のその年10月、處女歌集「睡蓮」を出版。装幀は当時著名な和田英作画伯で、23才の若き御風は感激したという。

一年後の明治39年7月に早稲田大学を卒業しているが、その頃は、前年島村抱月によって再刊された、第二次「早稲田文学」社に抱月の肝煎りで入社していた。又、その年2月創立した坪内逍遙主宰の文芸協会にも師島村抱月と傘下に加わっている。

尚、同じ頃早稲田文学に通う傍ら、飯田町仲坂下のユニヴァーサリスト教会の中の英語専門の私立成美女学校に約1年、教鞭を取っていた。教師には、生田長江、安部能成などがおり、生徒には平塚明子(雷鳥)、青山菊枝(後の山川均夫人)などがいた。後に雷鳥女史はこの頃

の思い出を書いている。

当時の成美女学校での教師と学生の写真は、御風資料として糸井川歴史民族資料館に所蔵されている。



右より 相馬御風・長女 文子・妻 照子

相馬御風（人と作品）

明治16年（1883）～昭和25年（1950）

評論家・詩人・歌人。新潟県西頸城郡糸魚川町生まれ。本名昌治。小学校時代より、俳句、短歌に親しむ。早大英文科卒業後「早稲田大学」の編集に従事。「詩界にお

ける自然主義」の立場から住や社会の暗面を好んで詩の素材に取り上げ口語自由詩による詩歌の革新を提唱した。また「文芸上主客両体の融合」や「詩歌の根本的革新」の評論、「樋口一葉論」などの作家論を「早稲田文学」を中心に発表する。大正5年、一家をあげて故郷糸魚川に移住、その後は、良寛に傾倒し良寛の研究をつづけた。1950年糸魚川に没する。（『日本近代文学大事典』より）

尚、執筆者の相馬文子氏は御風の長女。日本女子大國文科卒。日本女子大附属図書館を退職後現在日本近代文学館図書資料委員会幹事、日本近代文学館評議員として活躍中。

著書に「相馬御風とその妻」等がある。

マイ・ブック マイ・ストーリー



日本酒で乾杯



酒の味をいつごろ憶えたか定かではないが、いつの間にか洋酒を愛飲するようになっていた。したがって、宴席では主流を占める日本酒には手をつけないことさえあった。

ところが、こんな酒に対する私の嗜好もある時から急に変化を遂げたのである。転勤で私の隣席となった彼が大の日本酒党で、機会ある度に日本酒の良さについて、私の耳もとでささやき始めてからである。確か最初は、吟醸だの純米だのという醸造法の話だったように思う。そのうち最近はやりの地酒を揃えた店へつれて行かれ、各地の名酒とやらを勧められたのである。

少し冷たい日本酒はなんの抵抗もなく咽を通りすぎる。そして口中にさわやかな香りを残す。そう感じた時から私は日本酒党に組みさせられてしまった。今では私の付け焼刃な日本酒論に迷惑している仲間も多いはずである。

図書館にも日本酒を紹介した本は多い。名酒は、米と

水と杜氏の腕が各地の気候や風土と調和してつくられる。したがって名酒紀行的な本は、酒の生れた由来、とくに名酒づくりに生涯を捧げる酒造家をあげ、面白い読物に仕上げている。

酒と健康を取り上げた本も興味深い。著者が日本酒愛飲家の立場から、健康に悪いのは酒ではなく、酒に加えたアルコール、糖類などの添加物であると主張している点が、注目すべきところである。

一方、酒税に焦点をあて、酒が国家財政に果して来た役割を説く著作も面白い。日本酒が若者の間で復権しつつあるこの頃、日本酒談義も梅雨払いに有効と考える。



(H)

「日本酒入門」	中尾 進彦	596
「日本の地酒紀行」	高木 国保	596
「ほんとうの酒うその酒」	郡司 篤孝	596
「本物の美酒・名酒を選ぶ」	穂積 忠彦	596

子ども絵本展に思う

中村光夫

このたび目白台図書館で、わたしの手元にある資料の中から絵本類を展示していただくことになりましたが、その経過やねらいなどを少し書かせていただきたいと思います。

昨年の秋、わたしの勤務する青柳小学校へ目白台図書館の職員のかたが子どもたちに本の紹介にお見えになりましたが、ちょうどその時、わたしのクラスで絵本の展示をしていました。「1の1子どもギャラリー・わたしたちの町の子どものための芸術家たちをしのぶ」という題で、たしか竹久夢二の絵ののっている絵雑誌をかざっていたのですが、それを見ていただくことができたのでした。そしてそれがきっかけで今回の展覧会がおこなわれることになったというわけです。

わたしの資料が、一人でも大勢のかたに見えていただくことはわたしにとっても嬉しいことですので、その後、何回か図書館にうかがい細かい打ち合わせをすると同時

に、資料の整理や説明の文章書きや地図や年表をつくる仕事などを1カ月以上かけて少しずつやってきたのです。

わたしがこの展覧会で見てほしいと思うことは、文京区には昔こんなに子どもたちにやさしく接してくれた大人たちがいたんだ、ということです。現在の子どもの置かれている状況を見ているとあまりにも堅くて息がつまりそうになるような気になることが多々あるのですが、もっと子どもの「思い」を大切にしたいものだと思えるからなのです。

あの美人画で有名な竹久夢二の「子どもが9本足の馬を書いても、とがめてはいけない・・・。」という言葉などは、この際ぜひ知って欲しいと思うのです。また、小石川西丸町で、学校にも行けない貧しい子どもたちのために童謡を聞かせてあげた野口雨情のことや、帝展審査員というりっぱな絵かきさんでありながら、子どものために素晴らしい絵をかきつづけてくれた清水良雄のこと、また、ずっと昔には、粗末な子どものための浮世絵を死ぬまでかきつづけてくれた『よし藤』という町絵師

がいたこと、戦後では、病気の体をおして子どものために素晴らしい絵をかきつづけてくれた茂田井武という画家がいて、わたしたちの町・文京区に住んでいたこと、また、直接に絵や童謡をつくらなくても、子どものための出版事業を起こして、素晴らしい本を子どもに出しつづけてくれた木元平太郎という人がいたこと、そして、その本に美しい詩を発表して子どもたちを慰めてくれた金子みすゞという女の人がいたことなどなど、ぜひ知っていただきたい・・・、こんな気持ちで毎日準備してきたのです。

これらの資料は、いずれもありふれた子どものためのものにすぎませんが、今ではほとんど見ることのできない貴重なものばかりです。印刷技術なども、たしかに粗末ですが名も無き職人さんたちの手を経て作られたもので、今の



竹久夢二
「歌時計」より

本より美しく見えることさえありますし、また、絵自体も大正期のヨーロッパの先進的な絵画運動の発表の場としてかかれたものが多く、今見ても決して古くさいものではないと思うのです。いやかえって、今の子どもたちに与えられている絵本に無い新鮮さや芸術性を感じることができるとさえ思います。はじめにも申しましたが、わたしは、この展覧会を、一人でも多くの人、大人たち、母親たち、先生がた、そしてなによりも今の子どもたちに見てほしいと思っています。ぜひ、みなさんそろっておでかけいただきたいと思います。

そして最後に、この展覧会の成功を祈るとともに、この会に美しく貴重なコレクションと楽しいお話をお寄せくださることを快諾くださったアン・ヘリング先生ならびに、このような素晴らしい催しを計画・準備・実施してくださった目白台図書館の山谷・馬淵・小久保さんらスタッフのみなさんに深い敬意と感謝の気持ちを述べてこの小文を終えさせていただきます。ありがとうございました。

地域探訪シリーズ (3)

神田川の巻

今年は雨が少なく、水不足が心配されています。どうも私たちは「給水制限」などといった事態にならないと、水の大切さを考えず、知らず知らずのうちに無駄使いしているようです。東京の水の大部分は利根川水系など都外の水源にたよっています。そもそも、奥多摩の水を確保するために多摩地区が東京都に編入されたくらいですからね。では、東京の水問題はいつ頃から生まれたのでしょうか、それは、徳川家康が江戸に入城した頃から既



神田川流路図

に始まっていたのでした。近世の始めに、日本各地で城下町が形成されたのですが、その経営のため上水道が敷設されたという例が多くあります。城下町という近世都市を支えるにも、生活用水の確保が必要だったのです。もちろん、井戸を掘るということも行われていたのですがこの頃の技術では、海に近い低地などでは掘っても必ず良い水が得られるというわけではありませんでした。

あとは湧水にたよるくらいでした。享保年間（18世紀初め）になると「掘抜井戸」という、普通の深さから更に、井戸の底に竹を打込んで掘りすすんで良水を得る技術が開発されました。この技術の普及により江戸の町にも多くの井戸が掘られていったようです。さて、



江戸名所図会より

そんなわけで江戸の町の発展に伴い神田上水を初めとして、玉川・本所・青山・三田・千川のいわゆる六上水が

整備されていたのです。

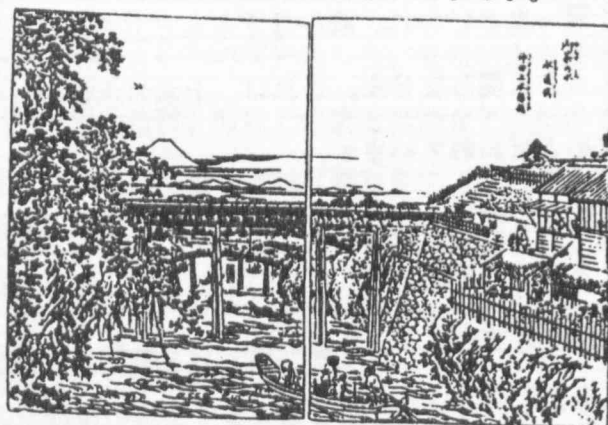
神田上水の堰がこの“関口”に設けられたのですが、何故この地に堰が設けられたかという、潮の干満の影響を受けなくするためであったのです。つまり満潮時に逆流してきた水を上水にいれないためなのです。この堰は“大洗堰”と称し、一般にはその流れ落ちる滝の音から“どんどん”と呼ばれていたようです。『江戸名所図会』に載っている絵から想像するだけではなく見てみたかった景色です。この堰から取入れられた水は、御茶の水まではまだ開渠で通され、神田川を掛樋で渡ってから暗渠で、江戸城・町方へ給水していました。この上水を使うには、今と同じように使用料を払わなければならない、水銀・水銭といわれていました。また、上水の維持管理には沿岸の各村、町にその責を負わせていたのですが、今と同じく雨で増水すれば濁ります。その泥水が樋の中にも溜るので、その除去作業も行われました。それでも「江戸の水は泥臭い」と言われたようです。もちろん、今の汚れとは質が違うわけです。

神田川は昭和40年の新河川法により全体を神田川と呼ぶようになりましたが、以前は水源の井之頭池からこの大洗堰があった大滝橋までを神田上水、その下流の飯田橋付近までを江戸川、さらにその下流を神田川と呼んでいました。神田上水と呼ばれるからには水源確保のためこの水路になんらかの手立てが施されたはずですが、そのことはほとんど分っていません。開発者についても大久保主水という説と内田六次郎という説があり、開発時期は大久保説だと天正18年ころ、内田説だと寛永年間とされています。ちなみに大久保主水は神田上水の前身であったろうとされる小石川上水を開発した功績で「主水」の名を貰ったといわれ、読みは「もんど」ではなくて「もんと」と濁りません。これは、上水の水の濁りを嫌ったためといわれています。

次に、この神田上水の工事に「なんらかの形で参画」とされる“松尾芭蕉”についてですが。彼についてもよくわかっておらず、日雇人足として石や土を運んでいたのかもしれないし、監督官として工事の指揮をとる

奉行であったかもしれない。私としては、人足仕事の休憩中に一句捻っていた芭蕉が親しみやすいが、そうであればそんな余裕はなかったかもしれません。

関口芭蕉庵は深川芭蕉庵と違って芭蕉がそこに住んだわけではなく、後世に芭蕉を慕う人たちによって建てられたものです。現在、芭蕉庵は講談社社長の野間邸の一部となっていますが、明治俳壇の長老の一人伊藤松宇という人が野間家よりここの管理を任されて住んでいました。伊藤松宇が集めた俳書は『松宇文庫』として残され、現在講談社が保存しています。復刻版として同社から出版もされたのですが現在は絶版中のようです。



江戸名所図会より

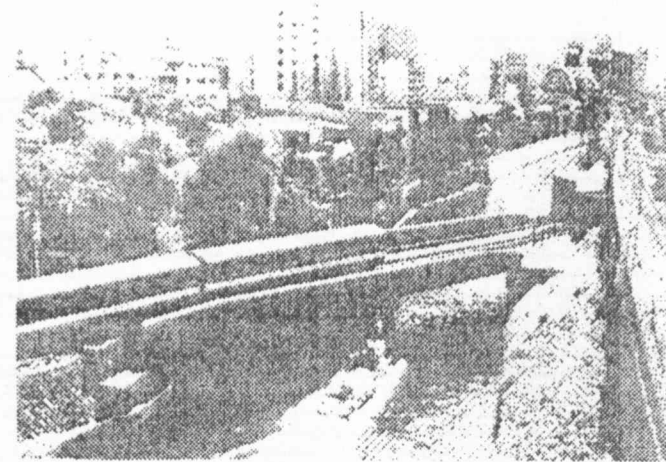
300年も利用されたその神田上水が廃止されたのは明治34年で、水質の悪化によって、明治26年から玉川上水を利用した改良水道が敷設されていったのです。

ところで、現在の神田川しか知らない子供たちは「神田川の水を飲んでいた」ということを学ぶのでしょうか。そして、たぶん「昔の神田川には、そんなにきれいな水が流れていたのか」と思うのでしょうか。だが私には、それだけに止まっていたのでは…という思いが残ります。ある人の話で「瀬戸内海の水質汚染で、漁業補償金が出たとき、子供が『おとうさん、もっと海が汚れるといいね。お金がもらえるから』といった」という。そしてこれについて「もしこの子が漁業を手伝っていれば決してこんな発言はなかった」と続けていた。「本当に大切なのは何か」ということを知らないことは、怖いことです。

ところで私自身、江戸川橋の近くの神田川沿いに5年程暮らしたことがありました。入居したときは、「ふ〜ん『窓の下には神田川』か」と思って、川を眺めました。残念ながら同棲ではありませんでしたが。川の印象は

「きたないなあ」の一言でした。なにしろ私のもっていた川のイメージは“河原があって水も澄んでいる”というものでしたから。怖かったのは洪水でした。台風や集中豪雨があると、水嵩が増していくのが目にみえてわかるのは驚異でした。不安に追い撃ちをかけるようなサイレンの音を何度か聞き、とうとう水嵩が一杯になると、橋が関のようになり、その横から水が溢れ出し、道路より高くなっている堤も越えて低いところへどんどん流れていく。そんな光景を茫然と眺めていましたが、ふと、「こんなに高低差があったのか」とつまらない感心をしたことがありました。当時、この災害は人災だと言われました。もちろん、それは確かでしょう。だが、川は本来生きているものです。成長もするし、氾濫によって変化し、他の川の成長によって消滅もする。川は自然のサイクルのなかで大事な役割を果たしている。なのに、そんな川を私達は殺しかねません。最近「玉川上水の分水路の野火止用水に蓋をするという施策に対して、市民の反対運動によって、あらためてこの用水の存在が他の多

くの市民に知られ、最終的には保存される。」ということがありました。蘇りつつある神田川が千川のような暗渠にならず、その水の流れと魚景を我々の目で眺め続けていきたいものです。(H・K)



聖橋附近の神田川

★★ あ と が き ★★★★★★★★★★★★

梅雨の季節、雨に映える花といえはまっさきに紫陽花
があげられます。でも今年は雨が少ないせいか、花の色
も少し生彩を欠いているように思えます。日頃なにげな
く使っている水ですが、不足となるとあらためてその大
切さを考えてしまいます。

さて、前号で最終回となりました「小川未明と目白台」
にかわりまして、今回から「相馬御風と目白台」が始ま
ります。御風の御息女の相馬文子様に執筆して戴くこと
になりました。おたのしみに……。

※表紙絵「東京おもかげ画帳」筑摩書房・部分

こもれび (62・初夏号) 通巻第11号

昭和62年 6月30日 発行

平成 5年 6月20日 2刷発行

編集・発行 目白台図書館 ☎(3943)5641

〒112 文京区関口3丁目17番9号

文京区立目白台圖書館館報